

リンゴの樹を繋げて省力化～宮城県発の栽培技術～

宮城県農業・園芸総合研究所はリンゴのジョイントV字樹形による栽培技術を開発した。低樹高で管理や収穫などが効率よく行えるため、作業時間が慣行栽培に比べ3割減となる。登米市中田町では3軒の生産者がこの技術を導入しており、栽培に取り組んでいる。

そのうちの1人である千葉隼人さんはりんご1.5畝を栽培しており、この技術を同市で初導入して今年で6年目となる。

剪定中の千葉隼人さん



きっかけは祖父の代から植えていたマルバ台木10畝の更新だった。従来は高所作業が多く、作業時間が掛かっていた。そこで、省力化を考えていたところ、県の提案があり、この栽培法を導入することとした。

課題は開園時の費用で、枝を誘引する

平棚の資材や多くの苗木を必要としたため、農林水産省の果樹経営支援対策事業を活用した。

ジョイント栽培圃場



千葉さんは「はしごを使わなくなり、収穫をはじめほとんどの作業が素早く終わる。令和4年の収穫量は5ト/10畝で、県の基準より1.5ト多い。果実の着色や肥大も良好で歩留まりが高い」と評価しつつ「面積を増やしたいが費用が高むなあ」と苦笑しつつ語った。

収穫期の様子（令和4年11月）

